



「待って！」

入り口の戸をしめる前に、女の子が、飛び込んできた。蓮は、がっくり。

——せっかく、自分ひとりだけで、このミステリーハウスのトリックを見やぶろうと思っていたのに。

女の子が、「あれっ」と大きな目を丸くする。

「蓮も、ここの出口さがしゲームにチャレンジするのかもしれないか。」

足の速さも卓球クラブも、運動では、クラスで一、二をあらそうライバルだ。だが、勉強だけは、ずっと先を走っていて、とても追いつけそうにない。

美月が飛び込んでくると同時に、入り口の戸がぱたんと閉まった。頭上から、電子音的な声が六角形の部屋にひび

きわたる。

「ようこそ、わがミステリーハウスへ。では、ただいまより出口さがしゲームを始めます。タイムリミットは一時間。ぶじに出口までたどりつくことをいっています。ヨーイ、スタート！」

すぐに美月が、部屋をかこんでいる板戸を一枚ずつ手でおし始める。

すると、正面の板戸がぐるりとまわった。

板戸の向こうには、暗いろうかが細長くのびている。

「やつぱり、どんでんがえしか。楽勝だね。さあ、行こう」

さっそく美月に先をこされてしまった。くやしいけど、しかたなく蓮もあとに続く。ろうかは真っ暗。ただ、正面のつきあたりのかべに、はり紙があり、

吉橋通夫

山本久美子画